

"Learning about Sexuality and Dating" at the Special Needs School : Planning the Class and the Practice

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27240

特別支援学校における“恋愛学習”

—授業案の検討と実践—

綿引伴子・村瀬真理子*・北瀧理美*

“Learning about Sexuality and Dating” at the Special Needs School : Planning the Class and the Practice

Tomoko WATAHIKI, Mariko MURASE and Michimi KITAGATA

I はじめに

障がいのある子どもたちのセクシュアリティを育む教育は、全国的な組織である「人間と性」教育研究協議会が中心となって実践と研究を蓄積してきた。しかし、障がいのある子どもに対するいわゆる性教育については、「寝た子を起こすな」といった考え方が依然として根強い状況がある。さらに、男女共同参画社会やジェンダー、性教育、家庭科教育等へ組織的・政治的な大きな圧力で攻撃・介入する“バッシング”“バックラッシュ”が強まるなか、全国的に教育委員会や管理職が過敏になり、セクシュアリティ教育を行うことが困難な状況になっている。保護者の理解のもと「こころとからだの学習」として、小学部から高等部までの12年間を見通して発達段階別に取り組み、授業内容を充実させてセクシュアリティ教育を行ってきた東京都立七生養護学校（現在は特別支援学校）と教員が、誤解と曲解のもと東京都から不当な介入・攻撃を受け、裁判を起こしていることは代表的な例である¹⁾。

WHOでは「セクシュアリティ<性>は、生涯を通じて人間の中心的局面をなすもので、セックス(性別)、ジェンダー・アイデンティティ(性同一性)、ジェンダー・ロール(性別役割)、性的指向、エロティシズム、性的快楽、親密さ、生殖を含む。<性>は、思想、夢想、欲望、信念、態度、価値観、行為、習慣、役割、人間関

係において経験され、表現される。<性>には、これらの側面のすべてが含まれるが、かならずしもそのすべてが経験あるいは表現されるとはかぎらない。生物学的、心理的、社会的、経済的、政治的、文化的、倫理的、法的、歴史的、宗教的、霊的な、さまざまな要因の相互作用に影響される」とされている²⁾。人間の性と生に関することを、かなり幅広くとらえた定義である。

セクシュアリティは人間が生きるうえで中核的特質の1つであると同時に、それには包括的内容が含まれている。人間の自立と共生を考える上では欠かせない概念である。恋愛学習はセクシュアリティ教育の一部と位置付けられる。恋愛は異性・同性を含め他者への関心・人間関係の広がりにとらえることができ、自立の一面とみることができる。障がいのあるなしにかかわらず、豊かな人生を歩むためには、人間関係を育て、自己主張、自己決定できる主体性のある人間として育てることは重要なことである。恋愛で人は次のようなことを学ぶことができる³⁾。相手との関係のなかであらためて自分の主体性が問われ、個の確立・個の自立性が育つ。相手に自分の思いを伝えるための積極的な行動・表現力やコミュニケーション力、目標達成のための実践力が育つ。相手が応えてくれること・好感をもたれることで“かけがえのない自分”としての確信・自己肯定感を強くもてる。思いどおりにいかない人間関係や人生を学び、

人間を見る目を養いたくましい人間として成長する。

2010年2月17日放送のNHK「福祉ネットワーク」では、「婚活！―障害者の恋愛支援―」と題し長崎県にあるコロニー雲仙の知的障害者の恋愛や結婚・子育てを支援する活動を紹介している。番組では、恋愛により休みがちだった仕事を休まずに頑張るようになった男性や、太り気味の男性が婚活パーティに参加するために、運動で体重減をめざしたりパーティの洋服を考えたりする様子が紹介された。恋愛により生活に張りが出て前向きに生きることは、障がいの有無にかかわらない。このような障がい者の恋愛や結婚を積極的に支援する活動はまだ少ないが、今後徐々に理解と支援活動が広がるのではないかと予想される。

本稿の学習は、「ストーカー的な行為など交際について問題が生じてきているので、授業をしてほしい」という特別支援学校からの依頼がきっかけで、著者である大学教員と特別支援学校教員とで検討して授業を構想し実践してきた。衣・食・住・身体・コミュニケーションなどについて学ぶ「くらし」の授業の一部で行った。通常は週1コマ40分の授業だが、学習内容により週2コマ（連続）行うこともあった。くらしの授業概要は年度により若干異なるが、2009年度は次のような内容・流れである。

- 衣（身だしなみ、清潔（洗顔・入浴・爪・髪・手洗い・髭剃り）、ロッカーやたんすの整理整頓、衣服たたみ、アイロンかけ、洗濯）
- 食（栄養、バランスのよい食事、基本的な調理（ご飯・おかず・みそ汁・野菜やフルーツの皮むき）、朝食、調理器具の使い方）
- 住（家事へのかかわり、掃除、掃除道具の使い方、雑巾がけ・絞り方）
- からだ・コミュニケーション（自分の身体、男と女、恋愛、飲酒、喫煙）

本授業は次のような視点・ねらいをもって構想した。

- ・恋愛を肯定的に受け止める（人を好きになっ

てもいいのだという安心感をもつ）

- ・自分のことが認められることから自己肯定感をもつ
- ・「話す―聞く」コミュニケーションを重視する
- ・自分の気持ちをことばで表現する、アピールできる
- ・マナーを知る（言葉遣い、合意、失恋、あきらめるなど）
- ・性犯罪の被害者にならない（プライベートゾーンを大切に守る、Noと言える、被害にあったら相談するなど）
- ・性犯罪の加害者にならない（ストーカー、不適切なメール、抱きつくなど）
- ・恋愛には正解が1つあるわけではない。何歳になっても悩みながら生きていることがわかる

上記の視点やねらいをもとに授業を構想し実践した。既存の実践では、『ドラマづくり』で恋愛を演じよう―大人になるイメージをふくらます学習⁴⁾、「ドラマのような恋をしよう～恋愛力が自己肯定感をつくる～」⁵⁾、「すてきな大人とのふれあいを！～ねるとんでデート～」⁶⁾等を参考にした。実施後に大学教員と特別支援学校教員とでリフレクションを行い成果や課題を検討し、次年度に活かしながら3年間行ってきた。2009年度実践については、授業後の生徒の振り返り（記述）、教員や参加学生の記述により授業の意味や課題を明らかにする。授業の進行はおもに綿引が担当し、村瀬・鶴尾・北潟がアシスタント的なかわりをした。

II 2007年度・2008年度の実践と検討

本学習は2007年度に始まり、2008年度、2009年度と3年間実践を行った。2007年度、2008年度は以下のように実践し、検討・修正を行った。

1 2007年度の実践

校内外で近年増えているトラブルから、つき合う時のマナーや周囲との関係、相手との距離

感を中心に学習することにした。

- i. 実施日時
2008年2月6日3限、2月13日3限
- ii. 担当教員
村瀬真理子（附属特別支援学校）・鶴尾千亜紀（同）・綿引伴子（学校教育学類）
- iii. 対象生徒
高等部1～3年生のうち9人（1年生4人・2年生2人・3年生3人／男子3人・女子6人）
- iv. ねらい
 - ・人間関係には、自分と相手との距離感や相手との合意が必要であることがわかる
 - ・つきあうことにかかわるマナーでは正解が1つというわけではなく、自分の気持ち、相手の気持ち、周りの人、状況などにより判断することがわかる
- v. 学習構成
<2月6日3限>

- ① 好きな人ができて交際が始まるまでの過程で注意すべきことを考える
 - ・生徒に問いかけ、意見を引き出しながら進める
 - ・好きな人がいるか、好きな人のことを考えたらどんな気持ちになるだろうかと尋ねる
 - ・好きな人ができたらかどうするか（伝える、伝えない）、どんなふうに伝えるか（メール、電話、直接など）尋ねる
 - ・相手が No の場合、どうするか、ストーカーとはどんな行為か意見を聞きながら説明する（合意の必要性）
- ② 交際が始まって、<手をつなぐ><キスをする><抱き合う>の行為は、どんな場所や時にしてもよいと思うかよくないと思うか考える
 - ・黒板に書いた表に、生徒たちから出された意見○×△（よい、よくない、わからない）を書いていく。人により異なる意見を書き込む（図1）
 - ・街の通り、デパート、学校内、バスや電車の中、カラオケを想定する

- ・生徒によっても意見が異なることを知る（当事者だけでなく、見ている周囲の気持ちも推測する）
- ・参観の教員にも尋ねる。教員によっても意見が異なることや、生徒との考え方の違いを知る
- ・国や文化の違いによる挨拶やマナーの違いを知る。答が1つではないので、自分の気持ち、相手の気持ち、周りの人、状況などにより判断することを理解する

	手をつなぐ	キスをする	抱き合う
街の通り	○△○	△○×	○△×
デパート			
バスや電車の中			
カラオケ			
学校内	○××		

図1 2007年度実践②の板書例

<2月13日3限>

- ③ デートプランをたてる
 - ・次の週末に大好きな人とデートをすることを想定する
 - ・各自プリントに記入する（もっていくお金、何に使うか、行きたい所、待ち合わせ時間、さよならの時間）（図2）
 - ・書いたプランを紹介し合う

なまえ _____

デートプランをたてよう！

もっていくおカネは いくらか	1000円 1300円
なににつかうか	ケ-ム 遊び 風食
いきたいところ	金沢 駅 ↔ 丸の内 駅 丸の内 駅の7階のY31に行く ↓ 2540円
待ち合わせのじかん	4月16日 17時30分～18時15分 8時40分 (仮見積)
さよならのじかん	5時30分
	けすたドッグマドビルに行く

図2 生徒のデートプラン

vi. 授業の様子と実践の検討

- ・①では、和やかな雰囲気の時おり笑いが起こるなかで、生徒はあまり恥ずかしながらにいつもより自分の意見や思いを率直に述べていた。教員の意見を聞き、自分たちとの違いに驚いたり、「え〜」(反対)と反応したりしていた。ハグするなど日本とは異なる他の国のあいさつについては、生徒から出された。
- ・③デートプランには楽しんで取り組んだ。具体的につきあっている相手とのデートを計画する生徒、身近な人を選ばずに歌手を想定する生徒、帰宅時間の電話連絡など、多くの生徒は現実的に想定し生徒の個性が表れていた。
- ・「〜しなさい」と徳目の強制を避け、自分で考え判断することを伝えようとしたが、知的障がいのある生徒たちにはもっと明確な言い方のほうがわかりやすいこともある。
- ・最初の導入では、友達、家族、歌手、スポーツ選手、教師など多様な「好きな人」をもっと出させて、「好きな人」の概念を広げるとよい。
- ・②状況によるマナーや③デートプランの場面設定は、より具体的に設定したほうがイメージしやすい。テレビドラマや映画のワンシーンを使えるとよい。
- ・デートDVは、10~20代の若者のあいだで少なくない実態が近年明らかになっているので、デートDVについて学習できるとよい。
- ・生徒たちより人生の少し先輩にあたる大学生から、恋愛やデートの話を聞く機会、話す機会があると、より現実的に考えられるだろう。次年度に取り入れることを検討する。

2 2008年度の実践

多くの生徒は2007年度の授業を楽しみ、恋愛を否定的にとらえず、自分の思いや意見を率直に述べていたので、大きく変更はしないことにした。2008年度は、学校以外にも出会いはたくさんあるので広い視野をもって人間関係を築くこと、性犯罪の被害者・加害者にならないようにすること、大学生への質問・話を中心にするこ

とにした。

i.実施日時

2008年12月10日3・4限、12月17日3限

ii.担当教員・協力学生

村瀬真理子(附属特別支援学校)・鶴尾千亜紀(同)・綿引伴子(学校教育学類)

中村桂(教育学部学校教員養成課程家政教育コース4年生)

iii.対象生徒

高等部1~3年生のうち12人(1年生1人・2年生5人・3年生6人/男子6人・女子6人)

iv.ねらい

- ・出会いは、卒業後にさまざまな機会や場があることを知る
- ・恋愛感情は悪いことではないこと、自然なこと、大事なこと、しかし無理につくることでもないということがわかる
- ・恋愛には互いの合意が必要であり、それを認識しないとストーカー行為や犯罪になることもあるとわかる
- ・性犯罪の被害者・加害者どちらにもなりうるということがわかる
- ・被害にあつたらだれかに相談できる
- ・つきあい方によって、いい関係にもトラブルを起こしやすい関係にもなることがわかる
- ・人間関係に関することでは、感じ方や考え方が国・文化・時代によって異なったり、人によって異なったりするので判断が難しい。自分の気持ちも大事だが、相手や周りのことも考えて、自分で考えて判断しなくてはならないことがわかる

v.学習構成

<12月10日3・4限>

① どんな出会いの場があるか知ろう

- ・参観の教員にも尋ね、さまざまな機会があることを示す
- ・学校内だけでなく、広い視野・希望がもてるようにする

② 「出会い→好き→交際」の過程で起こりうる問題について考えよう

- ・生徒に問いかけ、意見を引き出しながら進める
- ・合意が必要であることを知る
- ・ストーカーの被害者にも加害者にもなりうることや被害にあったときの対応を知る

③ デートプランをたてよう

- ・各自プリントに記入する（もっていくお金、何に使うか、行きたい所・順番(コース)、待ち合わせ時間・場所、さよならの時間、困ったときどうするか)
- ・書いたプランを紹介し合う（なぜそのようなプランを考えたのか問い、思いを表現させる）
- ・困ったときに相談できる人、場所を確認する

<12月17日3限>

④ 大学生に質問しよう

- ・前時の終わりに大学生に聞いてみたいことを書き、それをもとに参加している大学生に尋ねる。また、参加できなかった大学生に聞いてきたことも交えて紹介する。時おり参観している教員にも尋ねる。

vi. 授業の様子と実践の検討

- ・デートプランには、2007年度に用いた項目に「困ったときどうするか」を加えた。どんな時にだれに相談するか尋ねた。父母、きょうだい、友だち、ボランティアの人、職場の人、ジョブコーチ、交番・警察など状況と相談する相手を確認した。デートに限らず誰かに相談することが大事であることを強調した。
- ・生徒から大学生への質問には、「どんなところで付き合ったりしますか、お金がないときはどんなデートをしているんですか、彼女の分も払いますか、ふられたときはどうすればいいですか、合コンで出会いはありますか」等があった。特に男子生徒にとっては切実な疑問のようで、学生の話を受容した様子で真剣に聞いていた。
- ・学生からは、ふられたときには友だちに会う・話を聞いてもらう、合コンでは自分ばかり話をせずなるべく質問をしたり相手のよいところを見つけてほめたりする、食事の支払いは

自分（男性）がやや多めに出すなどが話された。トラブルを起こしやすい関係では、相手に合わせてばかりだとつらくなる、束縛しすぎる、食べ物の趣味が違いすぎるなどが話された。

- ・生徒は、先生には聞きづらいが知りたいことや疑問を、大学生に直接質問し話を聞くことができたことを喜んでいて、帰宅後、本授業のことを家族に話した生徒もいた。数歳年上の大学生の話はリアリティがあり、生徒の関心が高い。次年度には、大学生とのかかわりをより取り入れる内容を検討することにした。

III 2009年度の実践

7月、8月、12月と研究会をもち、2007年度、2008年度の実施・検討をもとに5時間分の授業を構想した。第2・3時の模擬コンパや第4・5時のシナリオ劇では、生徒の日常感覚に近い大学生4人に具体的な内容や進め方を考えてもらい、授業にも参加してもらった。出会いのチャンスを活かすには、相手や周囲との会話を楽しみながら、自分を表現・アピールすることが必要である。第1時に自己アピール表を書き、友だちと互いによさを見つけ合うことで自己を理解する。第2・3時には、記入した自己アピール表を利用しながら、模擬コンパで会話が弾むようにする。第4・5時は恋愛にまつわるトラブルについて、学生のシナリオ劇を見ながら考える。最後に学生への質問タイムを設ける。

i. 実施日時

2010年1月20日3限、1月27日3限・4限、2月3日2限・3限

ii. 担当教員・協力学生

村瀬真理子（附属特別支援学校）・北潟理美（同）・綿引伴子（学校教育学類）

中田淳平（学校教育教員養成課程家政教育コース4年生）・嶽亜也子（障害児教育教員養成課程4年生）・藤原文絵（同）・松田金義（同）

iii. 対象生徒

高等部1～3年生のうち15人（1年生5人・2

年生4人・3年生6人／男子8人・女子7人)

iv.ねらいと学習の展開

<1月20日3限>

[自己アピールをしよう]

ねらい

- ・自分のことや気持ちをことばで表現する、アピールできる
- ・自己理解・自己肯定感を高める

第1時 進行：綿引

- ・「恋愛」って知っている？
- ・どんな「出会い」がありそうか？ 趣味、サークル、スポーツ、職場、合コン、飲み会・・・
- ・来週は大学生から「合コン」について教えてもらおう
- ・出会ったチャンスを生かすには、自分のことをアピールしなくては
- ・アピールできるように、自分のことを振り返って自己アピール表に記入する（第2・3時のコンパに使用する）
 - ・書ける内容を自分で書く
 - ・友達や先生に聞く（エンカウンターゲーム風に、音楽(CD)を流し、途中で音楽を止め、そのとき一番近い人と、i 自己紹介し、ii 「あなたのよいところは・・・だと思えます」と言う。ゲーム後に自己アピール表に書き加える。教師も参加する）

- ・自己アピール表の項目は、名前・血液型・好きな食べ物・好きな活動・好きな芸能人・よく見るテレビ番組・好きな歌・好きなファッション・集めているもの・休日の過ごし方・得意なこと・時々ほめられること・性格・癖（図3）

<1月27日3・4限>

第2・3時 [ドキドキ コンパをしよう!](模擬コンパ)

ねらい

- ・恋愛に対して、学校内だけでなく広い視野や希望がもてるようになる
- ・コンパがどのようなものかを理解し、経験することによって、[話すー聞く]コミュニケー

ションを向上させる。相手の気持ちを考えながら自分の思いを表現できるようにする

- ・会話のポイントは、日常生活においても大切であることがわかる

「自己アピール表」

*自分自覚のことについて、いろいろと記入してみましょう。

名前	
血液型	B型
好きな食べ物	肉野菜
好きな活動	パソコン
好きな芸能人	有吉、オードワ、 ^{あやみ} あやみ、小ホク先生 (あやみ)
よく見るテレビ番組	音楽番組、 ^{たす} たす、 ^{お笑い} お笑い番組
好きな歌	グリーンの音楽、 ^{アパ} アパタイムズの音楽など...
好きなファッション	レック入りのジャケット
集めているもの	CD
休日の過ごし方	映画、カラオケ、ボウリング
得意なこと	車、デジタル家電、音楽
ほめられること	何事もやりがいにやること 自分を高めるために努力をすること
性格	やさしい
癖	先ほかに向かてたまに返事の遅りにしゃべって

図3 生徒の「自己アピール表」

第2時 (0.5h) (進行：中田)

- 1.コンパとはどのようなもので、何を目的に行うのかを学生が説明する（「話して！聞いて！ドキドキコンパ」と書いた紙を黒板に提示する）（写真1）
- 2.以下のコンパのポイントを書いた紙を黒板に貼り出す。楽しむことを強調する
 - ・みんなで会話を楽しむ（ねらった人とだけにならないように）
 - ・相手の話をしっかり聞く（質問をしたり相槌をうったりする）
 - ・自分の言いたいことははっきりと言ってアピールする

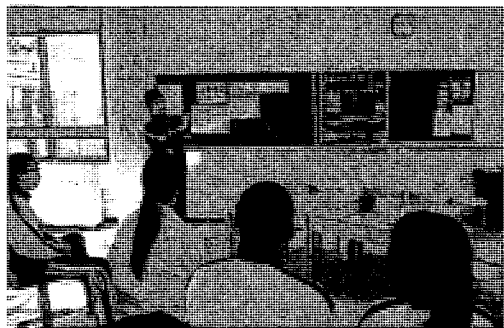


写真1 学生による“ドキドキコンパ”についての説明

第3時 (1.5h) (進行：綿引)

1.実際に模擬コンパを行う (写真2)

- ・生徒を3グループに分け、「生徒5人+学生2人」で3回行う (10～15分×3回)。自分が行うのは1回で、2回は友だちの様子を見る
- ・卒業後を想定して店での飲食場面を設定する
- ・第1時で書いたアピール表を持って行う

2.各模擬コンパ終了後、ふりかえる (模型マイクを持って綿引が生徒に尋ねる)

- ・行った生徒へ〈うまくできたこと、難しかったこと〉
- ・見ていた生徒へ〈よかったこと、こう直したらいいと思うこと〉
- ・大学生から〈よかったこと、改善したらいいこと。教師の意見の代弁も含める〉
- ・最後には、参観の教員からアドバイスや感想をもらう



写真2 “ドキドキコンパ”の様子

3.はじめにあげたコンパのポイントが日常生活 (日常の会話、コミュニケーション) でも大切であることを学生がまとめる

4.次回の「学生への質問」を考え、用紙に書く
<2月3日2・3限>

第4・5時 [恋愛にまつわる問題やマナーについて知ろう、考えよう]

ねらい

- ・恋愛にかかわるマナーを知る
- ・恋愛にまつわる問題について対応の仕方を考える

第4時 (進行：綿引) (写真3)

1.事前に生徒の身近に起こりそうな問題場面を設定しシナリオを作成する (なるべく極端で善悪の判断を下しやすいものにする)

- ・次の4つの場面を用意しておく

場面①：ストーカー的メールをしつこく大量に送る (嫌われる、拒否メールが送られる、アドレスを変更される)

場面②：それほど知らない人に自分の写真をメールで送る (自分の知らないうちに送信・ネット公開の可能性あり)

場面③：ストーカー的行為にあう (ついて来る、待ち伏せる。Noと言う (意思表示))

場面④：声をかけられて、ふらっと付いて行く

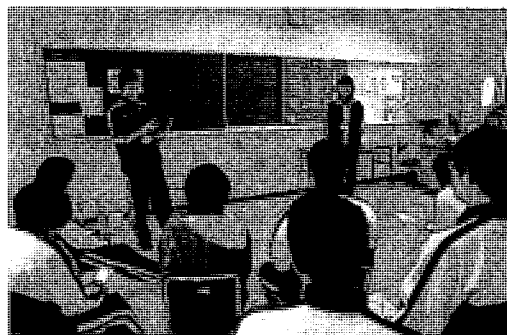


写真3 “シナリオ劇”の様子

2.シナリオを大学生が短い劇で演じる

生徒は大学生の劇を見て○×で判断をし (○×の札を上げる)、理由などを述べ意見交換する。その後大学生や先生の意見を聞く。この過

程を場面ごとに繰り返す

第5時(進行:綿引)(写真4)

3. 恋愛や日常生活について、大学生に質問をする

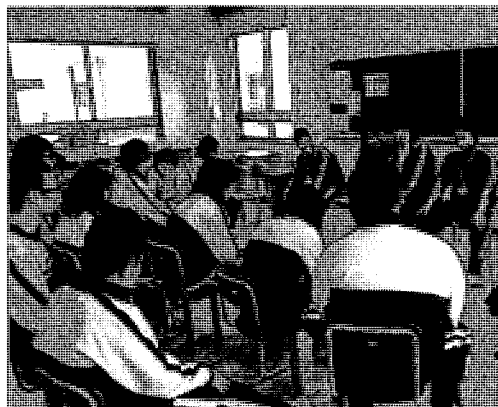


写真4 大学生への質問タイム

v. 授業の様子と実践者による振り返り

①第1時「自己アピールをしよう」

・エンカウンター風ゲームでは、自己アピール表を持って行き、1回ごとに友だちから言われたことを書きとめる時間を設けたほうがよい(聞いた内容を忘れてしまうので)。他の人からの評価を多くもらうことで、より自己理解ができ自己肯定感が高められるだろう。

②第2・3時「ドキドキコンパをしよう！」(模擬コンパ)

・第2・3時の模擬コンパに学生が参加した効果が大きかった。コンパにリアリティが出て、生徒は実際のコンパのように緊張していたが楽しそうに取り組み、大学生と話ができることを喜んでいて。口数の少ない生徒がふだんより話をしたり、ふだんは自分ばかり話をしがちな生徒が友だちに話をふったり、ふだんより弾んだ声・明るい表情で話したり、自分から質問したりする場面が見られた。印象に残った授業だったらしく、コンパのことを授業後に他の教員に話したり、帰宅後家族に話したりしていた。次年度になっても合コンのことを話したり、教員に「今年はないの？」

と尋ねたりしていた。

・第1時に作成したアピール表が模擬コンパに活かされ、話が詰まっても記入した内容を話題に出しながら進めることができた。

・1→2→3回と回が進むほど生徒の話が弾んだ。初めは一問一答だったが、大学生や教員からのアドバイスを活かして徐々に相槌を打ったり、他の人の話に自分の経験を重ねて述べたりして1つの話題で広がる会話になった。

・見ている生徒は、「たのしそうだった」「質問できていた」「大きな声でよかった」と友だちのよい点を指摘したり、「相手を見るとよい」「手元を見ないほうがよい」「もっと大きな声で」などのアドバイスをしたりした。

・参観教員からは「質問できていてよかった」「みんな楽しそうだった。先生も加わりたい」「〇〇君と〇〇さんがそれぞれ友達を連れてきて、3:3で行うとよい」「話しているときに、初めて会う人にはからだを触らないほうがよい」などの感想・アドバイスが出された。

・各回のコンパ終了後の学生からのアドバイスや評価は的確で、生徒たちはよく聞いていた。

・コンパで大事なことーコミュニケーションーを日常生活にどう活かすか考えさせるとよい。

③第4・5時「恋愛にまつわる問題やマナーについて知ろう、考えよう」

・シナリオ劇では、1つの場面演技終了後に、「こんなときはどうすればいいか」等をもっと問いかけ、生徒にもっと考えさせたほうがよかった。

・それを受けていくつかの場面では、それを生徒に演技させてみるのもいいのではないかと考えた。

・どの生徒を指名するのが適切か(どの生徒がどんなことを言いそうか)綿引にはわからないので、指名には村瀬・北潟のサポートがあったほうがよい。

・学生への質問では、事前に行った質問だけでなく、その場で尋ねたいことを聞いたほうが

よい。生徒は学生に聞きたいことがいろいろある様子だった。

④全体・その他

- ・日常的に接していない綿引の進行は生徒にとって新鮮で、適度の緊張感があつてよい。いつも接している教師だと、お互いに先入観で対応してしまうことがある。
- ・給食タイムに、学生と一緒に食事をしながら会話を楽しむ時間を設けてもよい。

IV 2009年度実践の検討

授業後の生徒や教員、参加学生の振り返りにより授業の意味や課題を明らかにする。それぞれに質問紙調査を行った。

1 生徒の振り返り

授業終了の翌週に、「恋愛学習」をふり返り、学習したことを確認した。特別支援学校教員が、学習について問いかけ思い出しながら、記入できる生徒（7名）が各自質問用紙に記入した。

① 恋愛学習について

コンパとは何か、合コンをするときのポイント、してはいけないこと・間違っていることを○×式で記入した。

コンパについては7人中6人が「みんなで楽しくお話ししたりお酒を飲んだりすること」と答えており、コンパがどういうものかは理解したようである。

合コンをするときのポイントは「質問したりあいづちをうつ」4人、「自分の言いたいことをはっきり言う」6人、「人の話を聞いてあげるために、ひたすら黙っている」1人、「話したい人とだけ話し、興味のない人とはしゃべらなくてよい」1人であり、おおよそは理解していた。

「してはいけないこと・間違っていること」では、「初めて会ったばかりの人に、友達と一緒に写っている水着の写真をメールで送った」に×6人、「なかよしの友だちだから、ちょっと恥ずかしいけれどお風呂に入っている時の写真をメールで送った」×6人、「大好きな人だから、どんな時でも、いつでも、メールのやりとりを

している」×1人・△1人・○3人、「メールには必ずすぐに返信をしなければいけない」×2人・△2人であった。シナリオ劇で学習した「メールで写真を送る」問題は理解したようだが、シナリオ劇で直接取り上げなかった内容は理解できていないようである。

② 学生との授業について

学生と授業をして、勉強になったこと、むずかしかったこと、また学生と授業をしたいか、感想を自由に記述した。勉強になったことでは、「合コンのことがわかった」3人、「たくさん話ができる」2人であり、むずかしかったことは、「○×クイズ」（第4時）3人、「合コン」2人（緊張した、つらかった）であった。7人全員が「学生との授業をまたしたい、話したい」と記述していた。感想では、「たのしかった」4人、「合コンは緊張した」3人、「具体的な合コンの場面を思い出して記述」4人であった。合コンは緊張したが話ができ楽しかった様子がうかがえる。生徒たちにとってあこがれる先輩的存在の大学生が、新鮮さと緊張感を与えよい刺激になったようである。第4時のシナリオ劇による恋愛にまつわる問題やマナーの学習は難しいと感じた生徒が多かった。

2 参観教員の評価

参観した教員6名に感想や意見を自由に記述してもらった。

合コンについては次のような記述があった。「生徒たちは楽しそうに会話を楽しんでいる表情をしていました」、「生徒たちにとってよい経験になったと思います。他人の気持ちを考えたり思いやりすることが苦手な生徒が多いので、「コンパ」ではみんなの話をちゃんと聞くことが大切なことをはじめに指導できたら、生徒達も気をつけることができたのではないかと思います。生徒たちは、学生のみなさんとの「コンパ」にワクワクとしていました」「生徒はとても集中していきいきしていました」

シナリオ劇については次のような記述があった。「言葉によるやりとりが主だったので、ポイ

ントとなることを板書してもよいのではと思いました」『実際の場面では「メールの返信がない」ことは、「忙しいから」なのか「嫌だから」なのか、メールを送った側には判断ができないこともあるのではと思いました。』「楽しい授業でした。大学生の寸劇があり、身近に感じられてわかりやすくなったと思います。4つの寸劇が終わった後で、前のシーンをなかなか思い出せないようなので、黒板に書き残すようにするとよりよいかと思いました。どうすればよかったかも寸劇ですとか、生徒の現状に合わせてせりふ選びやお店選びをすとか、色々バリエーションも考えられますね。』『『ナンパ』とか『ストーリーカー』とかということばは知っていてもそれが何を意味するかにつながない場合もあるなと思いました。恋愛というのは、本人が『よし』と思うか『いや』と思うかで○×が逆転するところが難しいですね。・・・個々の線引きが違うのですが、『困ったらどうするか』を教えるにつきるのかしら？と思っていました。私ももっと考えないと子どもに伝えられないジャンルです。』

参観教員は、模擬合コンでは生徒たちが楽しんで会話をしているとみたが、内容を検討することでより「話を聞く・話をする」ことを学ぶ機会になるだろうととらえた。シナリオ劇については、生徒が理解しやすいように、板書したりもっと時間をかけて丁寧に説明したり、生徒が演じたりするようにしたほうが良いという複数の意見があった。

3 参加学生の感想

「大学生は、先生に比べてまだ身近な存在なので、お説教でなくアドバイスとして受け入れることができたと思う。コンパのように、自分が実際参加できたことはよかったと思う。」「特別支援の授業に直接かかわるのが初めてだったので、とてもよい体験ができました。模擬コンパは生徒が乗ってきてくれるかどうかや、しっかりとやりとりができるかどうかがとても不安でしたが、けっこう楽しくやりとりができ

たと思います。障がいをもっているからと言ってできる範囲を教師が勝手に決めるのではなく、やらせてみてできない部分は教師が支援しながらやったり失敗したりしながらやっていけばよいかと思いました。普通の学校に比べて、生徒1人1人と向き合えた気がします。』

学生にとっては、どうしたら生徒が楽しみながら学習のねらいを達成できるかを考えたり実践したりすることで、教師としての資質を高める機会になったといえる。

V まとめ

3年間の成果と課題をまとめると次のようになる。

- ・恋愛学習は思春期にいる多くの生徒にとって関心の高いテーマであり、学習に対し積極的に取り組む姿勢がみられた。
- ・模擬コンパでは、生徒が明るい表情でいつもより多く自分のことを話したり質問したりするなど主体性がみられた。生徒が中心となった活動であったことや、大学生とのかかわりが積極的な参加を促したと考えられる。生徒の多くは、大学生と話ができることや質問できることを喜んでおり、もっと話がしたいと思っていた。模擬コンパや恋愛学習は、人間関係についての学習の一部として他の学習との関連も考え、生徒の生活全般へ活かされていくよう位置づけることが必要である。
- ・シナリオ劇は、大学生がシナリオを作り、劇を演じたため、恋愛にまつわる問題やマナーを考えるのに具体的であった。しかし、生徒が参加する場面が少なく進め方が速かったため、生徒たちにとって理解するのが難しかったようだ。1つひとつの劇にもっと時間をかけ、言葉や行為の意味を具体的に取り上げたり、劇に生徒が参加したりする場面を設けたりするなど改善が必要である。
- ・デートプランは、プランをたてるだけでなく、他の学習活動と組み合わせながら実際にたてたプランを実行してみると、生徒たちがさら

に主体的になり実践的な学習になる。

- ・学生の参加は、生徒のみならず学生自身の教師としての資質向上にもプラスに影響すると考えられる。2009年度実践では、模擬コンパやシナリオ劇の具体的な内容を4人の学生に考えてもらい、授業にも参加してもらった。どうしたら子どもたちにとって「たのしくためになる学習」になるか、学生同士が議論しながら考え、それを実践で確認できるプロセスは有意義な経験となるだろう。
- ・思春期の生徒たちが大きな関心をもつ第二次性徴・性的接触や、高等部卒業後に経験する結婚・出産・子育ての将来設計を含めた実践案の作成は課題である。包括的なセクシュアリティ教育の内容・活動を、小学部～中学部～高等部と発達段階に合わせて積み上げていくカリキュラムの構想が必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 七生養護の教育を壊さないで－日野市民からのメッセージ刊行委員会「七生養護の教育を壊さないで－日野市民からのメッセージ」つなん出版、
- 2) 木全和巳「<しょうがい>のある子どもたちの思春期の豊かなセクシュアリティを育むために」 “人間と性”教育研究協議会 障害児サークル、2009、6-7
- 3) “人間と性”教育研究協議会 障害児サークル「障害児(者)のセクシュアリティを育む」大月書店、2001、57
- 4) 半田和利『「ドラマづくり」で恋愛を演じよう－大人になるイメージをふくらます学習』、SEXUALITY No.10、2003、158-167
- 5) 石井まもる「ドラマのような恋をしよう～恋愛力が自己肯定感をつくる～」、“人間と性”教育研究協議会「新版 人間と性の教育 第6巻 人間発達と性を育む－障害児・者の性」、2006、72-80
- 6) 間賀田清子「すてきな大人とのふれあいを！～ねるとんでデート～」、“人間と性”教育研究協議会「新版 人間と性の教育 第6巻 人間発達と性を育む－障害児・者の性」、2006、108-114